

第4章

カリキュラム受講者の概要と その効果、様々な実施方法

第4章 カリキュラム受講者の概要とその効果、様々な実施方法

1 職業センターで試行実施したカリキュラム受講者の概要

令和3年2月～令和4年10月の間、合計8名の受講者に対して本カリキュラムを実施しました。受講者の概要は表4-1のとおりです。

表 4-1 受講者の概要

受講者	A	B	C	D	E	F	G	H
性別	男性	男性	女性	男性	男性	女性	男性	女性
年代	30代	40代	50代	50代	50代	20代	30代	50代
受障原因	頭部外傷	多発性 脳梗塞	くも膜下 出血	心原性 脳塞栓症	脳出血	心原性 脳塞栓症	くも膜下 出血	頭部外傷
高次脳機能障害の状況	・注意障害 ・記憶障害 ・遂行機能障害	・注意障害 ・遂行機能障害	・注意障害 ・記憶障害	・注意障害 ・遂行機能障害	・注意障害 ・記憶障害 ・遂行機能障害	・注意障害	・記憶障害	・注意障害 ・記憶障害

2 効果測定の結果

(1) CATの結果

受講者のカリキュラム実施前後の結果を比較すると表4-2のような傾向が見られました。

受講者の半数以上で検査結果が向上した下位検査は、Auditory Detection（聴覚性検出課題）、Memory Updating Test（記憶更新検査）、Paced Auditory Serial Addition Test（PASAT）でした。これら3つの検査では、いずれも検査者の声やCDの音声を聞いて答えるため、聴覚的な注意の機能が求められます。

これら3つの検査の値がいずれも顕著に向上した2名の受講者（Dさん、Gさん）に個別にヒアリングを実施したところ、「言葉の聞き落としがあると分かっていたので、しっかりと聞くようにした」、「『良く聞かないと』と思って、目をつぶって集中して臨んだ」と述べていました。自分の注意の特徴が分かり、対策を取っていたり、検査者の声やCDの音声に対して持続的に注意を向けることができたため、結果が向上したものと思われます。

Digit Span（数唱）、Tapping Span（視覚的スパン）、Visual Cancellation（視覚的抹消問題）、Symbol Digit Modalities Test（SDMT）、Positon Stroop Test（上中下検査）では、わずかに値が向上している受講者はいましたが、顕著な差は見られませんでした。

表 4-2 CAT 検査結果のまとめ

			B		C		D		E		F		G		H	
			前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
CAT	Digit Span	forward (桁)	6	7	5	5	6	6	6	7	8	8	9	9	6	7
		backward (桁)	4	3	5	5	4	5	4	4	5	6	5	5	5	5
	Tapping Span	forward (桁)	7	5	5	7	7	6	5	6	8	8	9	9	6	7
		backward (桁)	7	6	7	6	3	4	3	4	7	9	7	6	4	7
	Visual Cancellation 3	正答率 (%)	100	100	98	98	100	99	98	98	100	99	100	100	100	100
		か 正答率 (%)	99	99	99	97	97	91	97	98	98	33	100	100	98	100
	Auditory Detection	正答率 (%)	84	96	98	100	76	84	78	72	98	100	96	98	100	100
		的中率 (%)	93	96	94	100	46	84	78	82	98	96	55	100	100	100
	SDMT	達成率 (%)	43	42	48	30	24	25	26	29	62	69	56	59	54	55
	Memory Updating	3スパン 正答率 (%)	100	100	99	100	88	81	63	100	100	100	100	100	88	100
		4スパン 正答率 (%)	81	63	75	75	63	75	38	63	88	94	63	88	94	81
	PASAT	2秒条件 正答率 (%)	63	62	60	8	35	30	22	25	87	98	52	77	60	83
		1秒条件 正答率 (%)	42	38	23	23	23	17	17	23	51	57	28	35	32	47
	Position Stroop	正答率 (%)	99	100	99	97	97	96	100	96	100	99	100	100	100	100
	Visual Cancellation 3	所要時間 (秒)	113	126	94	96	258	216	89	87	88	81	89	102	83	82
		か 所要時間 (秒)	183	140	108	124	276	224	117	110	114	104	111	131	97	89
Position Stroop	所要時間 (秒)	93	90	75	98	251	260	95	102	79	54	84	49	69	72	

※受講者 8 名中 7 名の結果

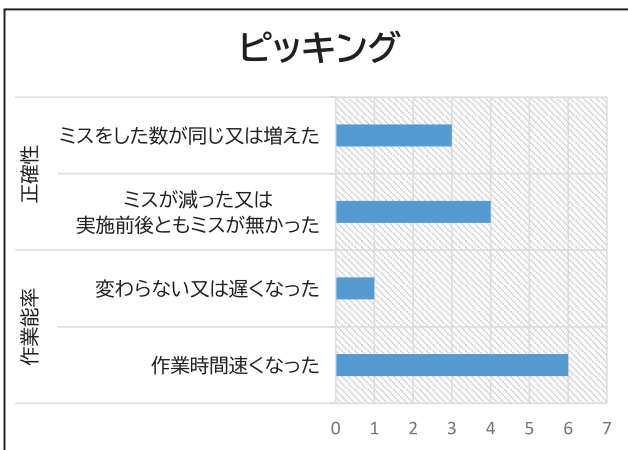
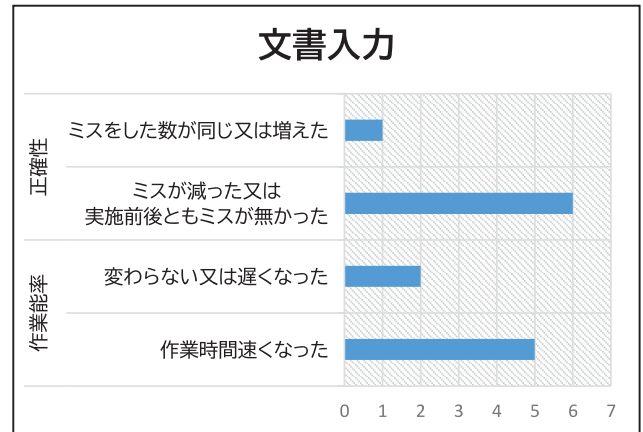
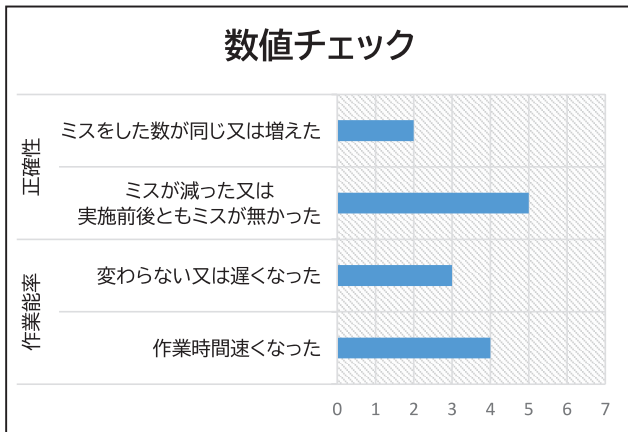
(赤字は年齢別カットオフ基準値以下。スコアが向上した項目は橙色に網掛け。)

一方、受講者の中には一部の低位検査において実施前より正答率が下がった者、実施前の結果は平均値と同程度であったものの、実施後は平均値より下がっただけではなくカットオフ値以下まで下がった者もいました。検査後にそれらの受講者からヒアリングを実施したところ、「前日はいつもよりやや睡眠時間が少なかった」と述べるなど、その日の睡眠時間や疲労などが検査結果に影響を与えた可能性があることを自覚する回答もありました。

以上のことから、カリキュラム受講後に自分の注意の特徴を把握し、対策を取ったことで検査結果を向上させることができた受講者はいたものの、カリキュラム実施前後の CAT の検査結果の変化からは、はっきりとしたカリキュラムの効果を見出すことはできませんでした。

(2) 作業検査

受講者のカリキュラム実施前後の作業検査の結果を比較すると図 4-1 のような傾向が見られました。



※ 受講者 8 名中 7 名の結果

図 4-1 作業検査結果のまとめ

数値チェック、文書入力、ピッキングいずれも受講者の半数以上に作業能率と正確性の向上が認められました。カリキュラム実施前は作業能率を意識するあまり、正確性の低い受講者が複数名いましたが、カリキュラム実施後は作業能率と正確性の双方に注意を向けて取り組むことができたと考えられます。

また、各受講者は自分の注意の特徴に合わせて、文書入力では PC 画面を拡大して入力した文字を確認したり、数値チェックではルーラーやバールーペ等を活用するなど対処手段を用いていたことも正確性を向上させた要因であると思われます。

ただし、プログラム受講前に地域センターの職業準備支援で何度か数値チェック等を体験していた受講者がおり、その方の場合、作業そのものへの慣れや学習効果の影響も考えられます。そのため、作業検査の結果の向上が、カリキュラム受講によるものとまでは言えませんが、対処手段の活用や正確性への意識を高めることが一定程度行えた結果であると思われます。

(3) 質問紙 (資料No.1、資料No.2)

カリキュラム実施前後に実施する注意機能に対する自己認識を確認する質問紙 (アンケート) では、自分の注意機能に対する自己評価 (質問 1、質問 7)、注意の特徴の理解 (質問 2、質問 3、質問 5)、注意の特徴の説明 (質問 4、質問 6) 及びカリキュラム全

体の感想を確認しています。受講者8名の回答結果を表4-3に、カリキュラム全体についての感想（自由記述）を表4-4、それぞれにまとめました。なお、Aさんは第3回から参加し、開始の際の質問紙の回収ができておらず空欄になっていますので、以下、Aさんを除く7名の変化を見ていきます。

表 4-3 注意機能に対する自己認識を確認する質問紙（実施前後）

受講者	A		B		C		D		E		F		G		H		
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	
1.私の注意力は…		2	2	4	2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
2.自分の注意力の 特徴を理解している		5	4	4	4	4	5	5	3	3	2	4	2	4	4	4	4
3.どんな時に自分 の注意力が良い/悪 いをわかっている		5	3	4	4	4	5	5	2	4	2	4	2	5	3	4	4
4.自分の注意力の 特徴を周囲に説明 できる		5	4	5	4	4	2	5	2	3	1	4	1	4	3	4	4
5.自分の注意力に ついての対処方法を 知っている		5	4	4	4	4	5	5	2	4	3	4	2	5	3	4	4
6.自分の注意力にど のような配慮が必要 か周囲に説明できる		5	4	4	4	4	2	5	2	4	1	4	1	5	3	3	3
7.自分の注意力を さらに良くしていけ ると思っている		5	3	4	5	3	4	4	2	3	5	4	4	5	3	3	3

回答方法（いずれも5つから選ぶ）
 問1 1=とても悪い 2=悪い 3=普通 4=やや良い 5=とても良い
 問2~7 1=全く思わない 2=あまり思わない 3=どちらでもない
 4=ややそう思う 5=そう思う
 ※評価を上げた項目を橙色に、評価を下げた項目を青色に網掛けしています。

7名の受講者全員が、1つ以上の質問項目で評価の向上が見られました。うち2名（Cさん、Fさん）は、7の質問項目のみ評価が下がりました。評価を下げたことについてそれぞれ個別相談の中で確認をすると、「自分の認知機能（注意機能）は改善できるものだと考えていたものの、グループワークを受けて改善は難しいことが分かった」と共通して話をしていました。今後に向けて、「対処手段によって注意力は上げていくことができることを学習した」と話をしており、機能そのものの改善は難しくても、対処手段を活用し機能を補えば、パフォーマンスの向上を図り得ることについて認識が深まったことがうかがわれました。

次にカリキュラム全体についての感想として、自分に合った対処や配慮事項を明記していたり、ツールや対処手段の効果を感じ、「他にも良くする工夫があるかもしれないので探し続けたい」、「様々なツールを使うことを試しながら自分に合う方法を見つけてよくしていければよいと感じています」という意見が得られました。

表 4-4 カリキュラム全体についての感想(自由記述)

指示にはメモと口頭説明が欲しい。(Aさん)
注意力は工夫によって変化するのではないかと思うので見直しをしたい。他にも良くする工夫があるかもしれないので探すことはつづけたい。(Cさん)
複数の物事を病気前のようにできなくてもわずかずつつでも同時に進められるようにしたいです。様々なツールを使うのを試しながら自分に合う方法を見つけてよくしていければよいと感じています。(Dさん)
レ点チェック、個別に作業を分ける、広い場所で数えることを行いたい。(Eさん)
同時に注意を向ける力についてはもっと対処していきたい。注意の向け方、やっている作業の補完方法を記憶障害と併せてうまく対処したい。(Gさん)

また、第1～3回グループワークのまとめの時間で、理解度と有用度を確認する自己チェック表（おもて面）を実施しました（[資料No.8](#)、[資料No.14](#)、[資料No.22](#)）。結果は表4-5のとおりです。

全体的に理解度、有用度とも高い結果となっています。「あまり理解できなかった」、「あまり役に立たなかった」を選択した受講者については、個別相談の中で理解できなかった点を確認してフォローを行いました。

なお、自分の課題と注意機能がどのように関連しているかイメージができないため有用度が低かったと考えられる受講者には、個別相談の中で、課題と注意機能を結びつけて説明する等、自分の注意の特徴を把握しやすくするための助言を行いました。

表 4-5 グループワークの理解度と有用度

第1回 グループ ワーク	注意障害の「続けられる力」「見つけられる力」について理解ができましたか？				今日のグループワークは、自分の注意の特徴を理解することに役に立ちましたか？			
	理解できた	まあ理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった	役に立った	まあ役に立った	あまり役に立たなかった	役に立たなかった
	4名	3名	1名	0名	5名	2名	1名	0名
第2回 グループ ワーク	注意障害の「同時に注意を向ける力」「切りかえる力」について理解ができましたか？				今日のグループワークは、自分の注意の特徴を理解することに役に立ちましたか？			
	理解できた	まあ理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった	役に立った	まあ役に立った	あまり役に立たなかった	役に立たなかった
	3名	5名	0名	0名	4名	4名	0名	0名
	注意障害に対処するとはどういうことか、について理解ができましたか？				/			
	理解できた	まあ理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった				
1名	6名	1名	0名					
第3回 グループ ワーク	注意障害の「注意を妨げる要素」について理解ができましたか？				今日のグループワークは、自分の注意の特徴を理解することに役に立ちましたか？			
	理解できた	まあ理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった	役に立った	まあ役に立った	あまり役に立たなかった	役に立たなかった
	5名	3名	0名	0名	5名	3名	0名	0名

(4) セルフモニタリング

受講者全員が、グループワークを通して、4つの注意機能について自分が気づいた特徴とその対処策、注意を妨げる要素とその対処策を自己チェック表、自己観察日誌（資料No.26）、注意の特徴まとめシート（資料No.28）を使って整理しています。

自己チェック表では、全受講者がグループワークの内容を理解し、自分の注意の特徴を記入できていました。しかし、プトレニングを行った際の気づきや感想を書く欄については、一部の受講者は、何を書けば良いのか分からなかったり、書くこと自体を忘れていた場面もあったため、支援者がフォローしました。

また、自己観察日誌について第4回で紹介し、第5回までの2週間にわたり記録を取り続けますが、日誌を記入できた受講者もいれば、4つの注意機能のどれに当てはまるかが分からず、記入できない受講者もいました。自分の注意の特徴について認識しやすいよう

に4つの注意機能に分けて記入しているため、受講者が円滑に記入できるよう、支援者は当該受講者の特徴が4つの注意機能のどれに該当するかを具体的に説明する等の助言を行いました。

(5) 行動観察

行動観察では、各受講者が自分の注意機能に合わせて様々な対処手段を試している状況を注意の自己対処・環境調整のチェックリスト（[資料No.3](#)）により確認しています。例えばPC入力作業では、入力後に画面を拡大して見直しをするなど作業に合わせた対処手段を確立している受講者もいれば、自分にとって効果がある対処方法が分からず、様々な手法を試している受講者もいました。

対処手段として多く活用されていたのは、手順書、アラームやタイマー、書見台、ルーペや眼鏡型拡大鏡などです。手順書は作業工程の抜け漏れを防ぎ、アラームやタイマーは休憩や次の作業にスムーズに切り替えるために使用しています。書見台はPC入力のミスを無くすため、PC画面の横に置いて活用し、ルーペや眼鏡型拡大鏡は文字を拡大して見間違い等を防ぐために用いていました。

また、疲労のマネジメントとして、時間を決めて休憩を取ったり、ストレスのかかる作業の前に呼吸法を取り入れる受講者もいました。自分が集中しやすい環境に気づきパーテーションやノイズキャンセリングヘッドホンなどを活用する受講者もいました。

3 支援事例

(1) 対象者の概要

Cさんは50歳代の女性です。在職中にくも膜下出血を発症し、その後、職場復帰しましたが、当時は高次脳機能障害を受障していることを認識できておらず、今まで通りに仕事ができないことに悩み、退職後に病院を再受診し、そこで高次脳機能障害の診断を受けました。その後、就職活動を進める中で地域センターを利用し、そこでの相談を経て当センターの利用に至りました。くも膜下出血を発症してから約6年が経っていました。

就職支援プログラムの開始にあたり、医療機関から提供された情報では、運動機能に特段の制限は無いが、高次脳機能障害として注意機能、情報処理速度及び記憶力の低下が見られ、思考の切り替えが苦手で、物事にこだわりやすい側面があることが指摘されていました。日常生活での諸動作に障害はなく、スケジュールの自己管理は可能で、就労意欲は高く、ある程度自分の傾向は自覚できている、等と記載されていました。精神障害者保健福祉手帳の3級を所持していました。

(2) カリキュラム受講前の状況

Cさんは、就職に向けて「自分の特徴を改めて知って、苦手なことは改善していきたい」と話し、作業やグループワークなどにも積極的に参加していました。

カリキュラム実施前に行ったCATでは、標準域にある項目が多い中で、Digit Span（順唱）とPASATの結果は、カットオフ値以下で障害域と判断されました。CATの結果を元に、聴覚情報を短時間保持するワーキングメモリが低いこと、情報処理速度が低下

していること、同時に複数の対象に注意を向けることが難しくなっていることなどについてCさんに説明したところ、「同時に注意を向けることが難しい」、「覚えていないことがある」などにはある程度自覚があったものの、日常生活や職業生活においてどのような影響が生じる可能性があるかについては、把握できていませんでした。

作業検査では「正確性重視で行います」と言って取り組んでいましたが、文書入力では誤りが多く見られました（例：“project”を“projdt”と誤入力する等）。数値チェックでは見落としを防ぐためにルーペを活用していましたが、途中で使わなくなり、また、文書入力では十分な見直しの時間を取らないなど効果的な対処手段があまり分かっていない様子でした。

CATや作業検査の結果等から、自分の障害特性への認識をより深め、効果的な対処手段を習得することで日常生活や職業生活の改善が期待できることを共有し、本カリキュラムの受講によりこれらの課題に取り組んでいくことになりました。

(3) カリキュラムの受講状況

Cさんは全てのグループワークに参加しました。

カリキュラム実施前に行う注意機能に対する自己認識を確認するための質問紙では、自分の注意力を「やや悪い」と評価し、また、「自分の注意力の特徴を理解しているか」、「自分の注意力の特徴を周囲に説明できるか」という質問項目には、「ややそう思う」を選択していました。「ややそう思う」との回答に対し理由を問うと、「どれにするか迷いひとまず選択した」と回答し、この時点では、自分の注意機能を理解できているという十分な認識があったわけではないことが確認できました。

ア 第1回グループワーク

体験ワーク・意見交換の中で、「（耳で聞く）続けられる力」、「（耳で聞く）見つけられる力」について、「苦手であるもののメモをとりさえすれば内容は把握できた」と話し、「（目で見ると）続けられる力」、「（目で見ると）見つけられる力」については、「以前から見落としがあり苦手であることを再認識した」と発表していました。グループワーク中に他の受講者から、見落としの対策としてルーラーが有効であるという意見を聞き、「今後はルーラーも活用したい」と関心を示していました。支援者ではない、同じ障害のある方の意見を聞き、それを受け入れるというグループワークの効果が現れていました。

イ 第2回グループワーク

第1回のプチトレーニングは忘れずに実施できました。自分の注意の特徴について気づいたこととして、「続けられる力」については「あまり時間を決めずに長い時間やってしまった。見直しなどは時間を決めて行うことが必要だと思った」と、また、「見つけられる力」については「見落としが多いことを感じた。必ず1度は確認を行おうと思う」と自己チェック表に記入し、意見交換の際に発表することができていました。

体験ワークや意見交換では、「同時に注意を向ける力」については「物語を読みながら作業すると理解力が低くなるため苦手である」、「切りかえる力」については「やや

苦手である」と発表していました。また、効果があると思う対処手段として、ルーラー、アラーム、付箋、メモを挙げていました。ルーラーは第1回から活用し始めて効果を実感しており、アラームや付箋については注意を切りかえる際に使えるかもしれないと述べていました。

ウ 第3回グループワーク

第2回のプチトレーニングのうち、指定の日時に本人から報告する課題と、スタッフからの質問に答えて注意を切りかえる課題の両方に対応できていました。自己チェック表の「切りかえる力」の欄には、スタッフからの質問に答えようと考えているうちに質問内容が分からなくなり、曖昧な回答になってしまった場面を振り返り、「突然声を掛けられた時でも相手の話すことを聞き漏らさないために、メモできるように体制を整える必要がある」と記入し、意見交換の際に発表していました。

体験ワークと意見交換では、「もともと資料等を広げて作業するタイプであり視覚的な刺激（雑然とした机）は気にならなかった」、「話し声や周囲の音などの聴覚的刺激により注意が妨げられた」と自己チェック表に記入し、意見交換の際に発表していました。

エ 第4回グループワーク

第3回のプチトレーニングは、注意を妨げる要素と対処策について1週間記録し続ける課題でしたが、毎日忘れずに自己チェック表に記載することができていました。Cさんの気づきとして「テレビなどの音により注意が妨げられることがあった」、「買い物の途中でポイントカードを忘れたことに気づいて落ち着かないまま買い物を続けていたら買い忘れをしてしまった」、「睡眠不足の日はすこし不安な感情などが出やすかった」などと記録し、普段の生活の中で把握できた自分の注意の特徴を書き留めることができていました。

体験ワークでは、聴覚的刺激への対処としてノイズキャンセリングヘッドホンを体験し、その効果を感じることができたことを、意見交換で発表していました。また、「PC画面を拡大することや必要に応じて拡大鏡を活用することで入力ミスを防ぐことができるのではないかと思った」と感想を述べていました。

オ 第5回グループワーク

第4回受講後の第5回までの2週間は、自己観察日誌を記入する期間であり、毎日記録ができていました。その際、課題となった行動が、4つの注意機能のどれに該当するのか分からない日がありました。これに対して支援者は、第5回のグループワークの場において、日常生活での自己観察結果と、4つの注意機能との対応を、具体的にわかりやすく説明し、Cさんが4つの注意機能を正確に選択した上でチェックができるようフォローを行いました。

自己チェック表や自己観察日誌をもとに、注意の特徴まとめシートを作成する際、Cさんはこれまでの記録をもとに自分の特徴を整理することはできていましたが、「得意なこと」の欄があまり書けていませんでした。そのため、支援者が助言を行い、最終的にCさん自身が図4-2のように完成させました。

意見交換では、注意の特徴まとめシートを基に、①自分の注意の特徴のうち得意なことと苦手なこと、②自分で対処すること、③職場に配慮を求めることを発表することができ、他の受講者からは、Cさんの発表はよくまとまっており、分かりやすいとの評価を得ました。また、他の受講者が発表した「指差しやマウスのポインターを使って、逆からも確認することで、正確さを向上させている」という内容を参考に、自分で対処することの記載を「必ず確認する」から「必ず入力した最後の文字から確認する」というように、より具体的に修正することができました。

	得意なこと	苦手なこと	自分で対処すること	職場に配慮を求めること
続けられる力	・集中力は保ちやすい	・集中し過ぎて、あとで疲れてしまう	・休憩を取り入れて、集中力の持続と疲労のマネジメントを行う	・60分に1回程度休憩を取らせてもらえるとうありがたい
見つけられる力	・ポイントを絞れば間違い探しなどはできる	・見落としや聞き落としがある	・メモする ・必ず(入力した最後の文字から)確認する ・PC画面を大きくする ・ルーラーを使う	・確認の時間など慣れないうちは時間に余裕を持たせてもらえるとうありがたい
注意を向ける力 同時に		・話を聞きながらメモがとれない ・話を聞きながら言うことを考えてしまうと話が分からなくなってしまうことがある	・話を聞く、メモを取るなど一つずつ小分けに作業する ・同時並行作業などは極力行わない ・行う作業に付箋を付ける	・なるべく一つずつ指示をしてほしい ・重要な指示は文書でもらえるとありがたい ・分からないこと、曖昧なことは確認させてほしい
切りかえる力	・突然話しかけられても落ち着いて対応ができる	・話をメモするなどしつかり切りかえないと聞き落としがでる可能性がある	・メモする	・メモを用意するなど切りかえる時間をもらえるとうありがたい
その他		・話し声や大きな音があると集中しづらい ・寝不足や落ち着かない状況だとミスが出やすい	・ノイズキャンセリングヘッドホンを活用する ・睡眠を十分にとる ・クールダウンの時間をつくる	・左記の対処策を行うことについて理解をしてほしい

図 4-2 注意の特徴まとめシート(Cさん作成)

カ カリキュラム実施前後の変化

カリキュラム実施前後のCATの結果は表4-6のとおりです。

カリキュラムの実施前後で比較すると、検査結果には大きな差は見られませんでした。

ただし、カリキュラム実施後のAuditory Detectionでは、他の受講者と同様に、目をつぶって聞く姿勢を整える等の対処手段を実行していました。また、PASATでは、指で机に数字を書いて計算するなど実施前には見られなかった工夫をして臨む様子が観察されました。

カリキュラム実施前後のMWSの結果は表4-7のとおりです。カリキュラム実施前後を比較すると、作業時間、正確性とも実施後の方が向上していました。

実施前は、対処手段を実施する様子は見られませんでした。実施後は、数値チェックにおけるルーラーの活用、文書入力における画面拡大、入力後に最後の文字から確認すること、ピッキングにおける注文書へのレ点チェックなどを対処手段として講じる様子が見られました。また実施前は、見落としをすることへの不安から、見直しを2～3度行う等、慎重になり過ぎる様子が見られました。しかし実施後は、効果的な対処手段を行っている安心感からか、一度の見直しで作業を終えることができる等の変化も見られました。

実施後アンケートでは、自分の注意力の評価を「やや悪い」から「普通」に評価を上げ、対処手段を実行することにより注意の課題の改善が期待できることを前向きに捉えることができていました。Cさんは質問紙の自由記述欄にも、「注意力は工夫によって変化するのではないかと思うので見直しをしたい。他にも良くする工夫があるかもしれないので探し続けたい」と記載してありました。

また、Cさんの注意の特徴まとめシートには、自分の注意の特徴、向いている対処手段、職場に求める配慮事項が整理されたことから、注意障害に対する学習カリキュラムが、Cさんの注意障害の自己理解や、対処手段の習得に役立ったことがうかがわれました。

表 4-6 カリキュラム実施前後のCATの結果(Cさん)

検査項目	実施前	実施後
Digit Span forward (桁)	5	5
backward (桁)	5	5
Tapping Span forward (桁)	5	7
backward(桁)	7	6
Auditory Detection 正答率 (%)	98	100
的中率 (%)	94	100
SDMT 達成率 (%)	48	30
PASAT 2秒条件 正答率 (%)	60	8
1秒条件 正答率 (%)	23	23
Position Stroop 正答率 (%)	99	97

表 4-7 カリキュラム実施前後のMWSの結果(Cさん)

作業検査項目		実施前	実施後
数値チェック	作業時間	7分 50秒	4分 21秒
	ミス	0	0
文書入力	作業時間	16分 0秒	9分 27秒
	ミス	4	1
ピッキング	作業時間	18分 56秒	11分 51秒
	ミス	1	0

4 様々な実施方法

ここまで、注意障害に対する学習カリキュラムの標準的な実施方法及び職業センターでの実施状況を中心に説明してきましたが、支援機関によっては、標準的な実施方法が難しい場合もあると思われます。開発のプロセスでは、以下に示すような様々な実施方法を試行し、カリキュラムの効果を上げるポイントを検討しました。

(1) 個別に受講できるようにする実施方法

基本的に支援者1名と受講者1名の環境で実施し、支援者2名で新聞記事を読み上げる「耳で聞く『見つけられる力』の体験ワーク」と雑談が聞こえる中で課題に取り組む「外的環境に関する体験ワーク」のときのみ、もう1名支援者が加わりました。

個別形式では、他の高次脳機能障害者の意見を聞いたり、対処の様子を見て参考にする等の場面設定が行えないため、以前の受講者の状況や意見等を紹介しました。

受講者からは「他の受講者の意見を聞くことができなかつたのは残念だったが、他者の動きや雑音を気にすることなく集中して聞くことができた。」、「個別だったので質問しやすかつた。」などの感想が聞かれました。

(2) カリキュラムに途中から参加できるようにする実施方法

受講者8名のうち1名は、第1～2回のグループワークが実施された段階では参加できず、第3回からの参加となりました。

第3回のグループワークは、静かな部屋やきれいな机の上と、そうではない環境などの異なる外的環境下で課題に取り組み、課題の成果の違いを体感する体験ワークを通して、自分の注意の特徴を確認できるグループワークです。このとき、他の7人は第1～2回で学んだ注意の4つの機能の観点から、自分の注意障害を説明できていました。これに対し途中から参加した1名の方は、第3回のグループワークでの体験ワークで自分の注意障害に漠然と気づくことができましたが、第3回のグループワークでの意見交換の場では、他の受講者と比べ、自分の注意の特徴を説明することが難しい状況となっていました。

そこで、自分の注意の特徴について説明する機会が最も多い第5回を受講する前に、当該受講者に第1～2回の内容を受講した結果、第5回のグループワークを円滑に受講する

ことができました。

(3) 様々な障害のある方(高次脳機能障害者を含む)への柔軟な実施方法

地域センターでカリキュラムを実施することを想定し、A地域センターの協力を得て、本試行では、高次脳機能障害以外の障害のある方も一緒にグループを形成しました。

受講者が参加し易いよう、すべてのカリキュラムを受講するのではなく、興味のある回のみ、単独の回のみでの参加も可能としました。また、第5回については第1回～第4回の受講を踏まえて参加する必要があるため、全4回の日程としました。

単独の回のみに参加した場合、注意機能への理解や自分の注意の特徴についての気づきが一部に限られる可能性もありますが、カリキュラムの受講が自分の注意の特徴に目を向けるきっかけになることを目的として、以下の方法で実施しました。

ア 対象者

A地域センターの職業準備支援や職場復帰支援を受けている利用者のうち、本カリキュラムに関心を示した高次脳機能障害者、発達障害者、精神障害者を対象としました。

イ 実施体制

第1回～3回は、職業センターから職員2名が地域センターを訪問し、進行役とフォロー役を担当しました。意見交換は2グループに分かれて実施し、進行役とフォロー役がそれぞれ意見交換の進行と板書を行いました。

第4回は、パソコン操作の状況などについて確認するため、職業センターの職員3名が訪問しました。

A地域センターの職員1～2名が、グループワークを見学し、グループワークの内容についてアンケートに答えてもらいました。また、必要に応じて、A地域センターの職員にはフォロー役の一部を担ってもらいました。

ウ 受講者数

第1回の受講者は9名でした。第1回を受講した方から体験談を聞き、関心を持つようになった方が参加を希望し、受講することになりました。

その結果、受講希望者数は最大16名にまで増え、その後欠席者が出たものの、各回の参加者は最大で13名となりました(表4-8)。

表 4-8 A地域センターの受講者の内訳

	発達障害	精神障害	発達障害と精神障害の重複	高次脳機能障害	計
第1回 グループワーク	1名	6名	2名	0名	9名
第2回 グループワーク	1名	6名	2名	1名	10名
第3回 グループワーク	1名	8名	3名	1名	13名
第4回 グループワーク	1名	7名	3名	1名	12名

工 時間・回数

1回120分（アンケートなどの記入時間を含む）、週1回のペースで全4回実施しました。

才 標準的な実施方法との主な変更点

受講者数が当初想定した人数よりも多数となったため、講義及び体験ワークは一斉に行い、意見交換は2グループに分けて実施しました。

受講者の状況を把握しているA地域センターの意見を踏まえ、受講者の中には「注意障害」という言葉に抵抗感を示す可能性がある方もいることを考慮して、講義等で用いる資料から「障害」の文字を無くし「注意のグループワーク」としました。また、講義中の言葉も、なるべく「注意障害」という言葉は使用せず、必要のある場合は「注意の障害」という表現を用いました。また、高次脳機能障害全体の説明を省略し、注意機能の説明をより詳しく行いました。

なお、巻末の資料集には上記の通り変更したグループワーク第1回資料（資料No.29）を載せていますので、高次脳機能障害のある方に加えて高次脳機能障害以外の障害のある方も受講する場合は、活用してください。また、第2～4回のグループワークについては、「注意障害」の「障害」の文字を削除する等の変更を行うことにより、高次脳機能障害者を対象とした注意障害の学習カリキュラムの資料をそのまま使うことができます。

力 効果

カリキュラム受講者と見学した支援者に対して、毎回アンケートを実施しました。受講者アンケートのうち、「今回のグループワークは自分の注意の特徴を理解することに役立ちましたか」という項目では、「役に立った(74%)」と「まあ役に立った(26%)」で、すべての受講者が本カリキュラムの内容が注意の特徴を理解することに役に立ったと感じたようです。また難易度について、全体としては「やや易しい(3%)」、「丁度良い(87%)」、「やや難しい(10%)」であり、「やや難しい」といった意見はすべて第2回に実施したアンケートの回答でした。分配性注意や転換性注意は、持続性注意や選択性注意よりも概念的に難しいと思われるため、丁寧な説明が必要と思われます。

支援者アンケートのうち、「今回のグループワークは受講者が注意の特徴を理解することに役立つと思いますか」という項目では、発達障害者についても精神障害者についても「非常にそう思う」または「そう思う」との回答でした。支援者も、本カリキュラムが発達障害者や精神障害者が注意の特徴を理解することに役立つと感じたようです。ただし、発達障害者については「体験ワークの正解不正解にばかりにこだわって自分の注意の特徴への振り返りが不十分になりがちであり、個別のフォローが必要であると思われる」との意見がありました。実施するにあたって気になる点としては、「全4回の講座をどのように職業準備支援や職場復帰支援に組み込むか、部分使いや対象者に合わせた不定期実施、スタッフの体制が課題」といった意見がありました。第4回については「個別対応が重なると進行役の話が聞きづらくなるため、3～4名のグループで行えるとよい」といった意見がありました。

また、精神障害の診断のみを受けている職場復帰支援受講者が、体験ワークを通して、自分の注意の特徴について認識（メタ認知）が高まり、発達障害を疑って受診することに

なったなど、想定外の効果も見られたとのこと。

(4) 障害を受け入れて対処方法を検討することが難しい場合

受講者の中には、障害された注意機能が日常生活や職業場面で支障をきたしやすいと捉えることへの抵抗感が強く、第1～2回のグループワークで学習する注意の4つの機能についても、自分のこととして受け入れることが困難である方がいます。

開発プロセスでは、そのような方に対し、上記(2)で試行したように、第3回や第4回から参加する方法が有効な場合があります。

すなわち、第3～4回の体験ワークにおいて自分の注意の特徴を体験により具体的に確認できるようにすることで、障害に対する抵抗感を減らし、自分の注意の特徴に対する理解が進む様子が見られました。

その結果、注意の4つの機能を学ぶ第1～2回の個別講義を第5回の前に受講した際には、自分自身の注意の障害に照らし、日常や職業生活場面での注意の4つの機能が障害されていることを理解することが、円滑に進むという効果がみられました。

なお、この場合は高次脳機能障害に対する認識を深めてもらう必要があるため、第1回グループワーク資料は資料No.4の標準的な資料を活用します。